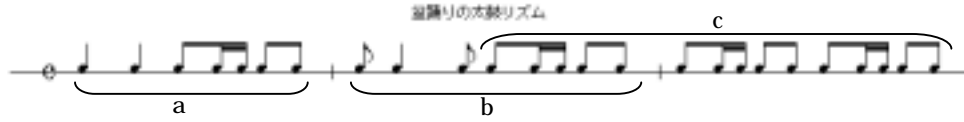


テーマ：モーツァルトに見られる日本のリズム (その 2)

要旨：我々が日本人であるが故にモーツァルトの中に聴いてしまう日本のリズム。類似のリズムを持つ他の作曲家の曲とも比較、さらにはさまざまな言葉遊びを楽しむ。

1. 盆踊りの太鼓のリズム (練習譜例の一部)



(1) a はまさに萩原哲晶『スーダラ節』(1961)のリズムである。このリズムはバッハ『トリオ・ソナタ ト長調 BWV530』(1732)を筆頭に、瀬戸口藤吉『軍艦マーチ』(1900)、本居長世『青い目の人形』(1921)、飯田信夫『隣組』(1940)の冒頭に使われており、何回聞いても大胆で斬新な感じがする不思議なリズムである。モーツァルトの K.462-1(1784)では冒頭ではなく後半に登場した。

(2) a を拡張した次のリズムが『花笠音頭』や K.503 のティンパニに頻出する。



クラヴィア協奏曲 ハ長調 K.503 (第1楽章411-412小節)



(3) b は『炭坑節』に、c は『北海盆唄』にそれぞれ使われているが、K.414 では両者が b, c の順で、K.385 では c, b 前半の順で出てくる (K.414 のホルンのリズムはモーツァルトの有名な付点付きリズム)。

クラヴィア協奏曲 イ長調 K.414 (第1楽章41-53小節)

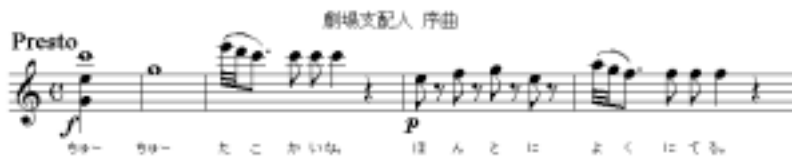


ハフナー交響曲 (第1楽章34-38小節)



2. 隠れた日本語

(1) 歌劇《劇場支配人》K.486 序曲 冒頭



(2) J. C. バッハ 歌劇《シピオーネの慈悲》序曲 冒頭



モーツァルトの曲が標準語に聞こえ、クリスティーアの曲が関西弁に聞こえるのはこの例に限ったことと思われる。大辞林などによれば「ちゅう、ちゅう、たこ、かい、な」はおはじき遊びなどで数を数えるときに二、四、六、八、十の代わりに唱える言葉であり、「ちゅうちゅう」は双六の用語「重二(じゅうに) (= 2 x 2)」が転化した「ちゅう」を重ねた語(= 8 = 蛸)が語源か。

(3) 言葉遊び

(a) 短歌

▲	ざ	バ	ぐ	か	た	▲
▲	く	ズ	ろ	さ	て	▲
▲	しゃ	ル	ぬ	ね	よ	▲
▲	も	あ	り	く	こ	▲
	し	そ	の	わ	に	▲
	ら	び		え		
	ず	は		て		

解説：「タテヨコに重ね加えて黒塗りのパズル遊びは作者も知らず」。以下の(b)、(c)のパズル遊びはモーツァルトもクリスティーアも当然知らなかったのであるが、如何にも知っていたかのような結果となるのは面白いことである。

(b) クロスワードパズル (詰め字パズル)

						皇	
						帝	
						テ	
						イ	
						ー	
						ト	
シ	ピ	オ		ネ	の	夢	
						慈	
						悲	

注：モーツァルトの《シピオーネの夢》は小スキピオが主人公。クリスティーアの作品は大スキピオのスペイン遠征が舞台。拘留されて反抗するイベリアの王が死刑となるはずの土壇場でスキピオの慈悲に救われるという当時の典型的なオペラセリアで史実には程遠いもの。この意味では《皇帝ティートの慈悲》と類似。

解説：J. C. バッハの曲はモーツァルトの歌劇《シピオーネの夢》K.126 と歌劇《皇帝ティートの慈悲》K.621 のタイトルをタテヨコに合成し、一部黒塗りしたかのようなタイトルで覚えやすい。

(c) 擬算数パズル

$$\begin{array}{|c|} \hline 1 \\ \hline 2 \\ \hline 6 \\ \hline 2 \\ \hline 1 \\ \hline \end{array} + \begin{array}{|c|} \hline 1 \\ \hline 2 \\ \hline 6 \\ \hline 0 \\ \hline \end{array} = \begin{array}{c} 二 \\ 四 \\ 六 \\ 八 \\ 十 \end{array}$$

解説：歌劇《シピオーネの夢》K.126 と歌劇《皇帝ティートの慈悲》K.621 のケツヒェル番号を重ねて加えると「ちゅうちゅうたこかいな」になる。しかも K.126 は K.621 のアナグラムである。

(d) なぞなぞ折り句

短歌の左上から斜め平行に読むと以下2つのなぞなぞが問われる。

(I) 捌^{さば}く具、寿司屋。加^かロールも出さぬ味。

(II) 手練^{てね}り。空^{そら}よく伸びず。小童^{こわっぱ}にエテ。

短歌の右上から斜め平行に読むと以下2つのなぞなぞが問われる。

(I) 高^{たか}テク? 左様。ハローネコ。差す抜くにクルリ。

(II) わしゃあの絵も袖・褶^{しびら}恥ず。

なぞなぞの解答例：(I) カリフォルニア・ロールすら不味いので、にぎりの味は推して知るべしの寿司屋。(II) 子供と猿を絵筆を使わずに描く前衛画家。(I) 電源プラグ付きレトロ風なハロー・キティのロボット。(II) 自らの作品に厳しい時代画家。

さて、日本のメロディとの類似、日本のリズムとの類似、日本語言葉遊びの素材の内から、偶然の一致では片付けられないと思われるものはどれだったのでしょうか? 偶然でないとするならば、何が必然で看過できないことなのでしょう? (8月2日改訂)